

無知と富の存在論 —経済学方法論と経済社会の存在論— 葛城政明

ヒッグス粒子の存在を確認するような研究プログラムこそ、科学の典型であろうか。巨大な加速器を建設して、世界中の叡智を集め、何十年もかけてはじめて見出されるような事実を、理論が予言していたならば、それはまさしく、イムレ・ラカトシュの述べた「目新しい事実 (novel facts)」の予言であろう。ラカトシュは、科学と似非科学を分かち「顕著な特徴 (hallmark)」は、その理論なしにはだれも予期し得なかったであろう予言であると、かつて BBC の放送で広範な聴衆に訴えた。そして、このような予言に失敗を続け、「退化 (degenerate)」する研究プログラムの典型はマルクス経済学であると述べた。しかし、物理学を模した経済理論に「標準モデル」があって、しかもこのような科学の「顕著な特徴」を提示しているかどうかは議論の分かれるところである。

トニー・ローソンの経済学批判は、まさにラカトシュのこの科学と似非科学について述べた事例の特殊性を突いている。ラカトシュが典型として挙げた事例はニュートンについてもアインシュタインについても、それは天体の観測により確認できるものであった。天文学の対象は、実験室を必要としないように、外部からの干渉がなく、規則性がそのまま常に実現する「閉鎖系」である。ローソンの議論の核心は、数学的モデル化がされる対象とは「閉鎖系」であるということである。巨大な加速器を建設することによって生み出される空間もまた、「閉鎖系」であり、そこではじめて、ほんらいありとあらゆるところにあるはずのヒッグス粒子を「叩き出して」その存在を確認することが可能になるのである。しかしながら、経済学の研究対象はそのような、物理学に典型的にみられるような性質をもっているのだろうか。もっていなければ、そもそもラカトシュの科学の基準も無意味である。ここに、ローソンが「存在論 (ontology)」の探求を提唱する理由がある。ローソンの言う「存在論」とは、対象となっている存在の構造と性質がどのようになっているのか、という問いに対する答えを指している。存在一般を議論する哲学上の存在論と無縁ではないが、経済学の対象がどのような存在かということを知っている。葛城はこのような視点から、経済社会の「存在論」を探求している。

具体的には、葛城の議論は、20世紀の前半にライオネル・ロビンズによってなされた「富」から「希少性」への転換において、捨象されてしまった存在の性質を問題にする。人類の諸文明の歴史まで視野に入れるならば、経済システムの成立としての文明に特徴として浮かび上がってくることは、個人を超えた壮大な「誤謬」への「富」の莫大な蕩尽である。この「誤謬」とは「情報」とか「不確実性」でカバーされるよりもラディカルな人間の根本的無知に起因する社会的存在である。葛城は、経済社会の存在論として、「富」と人間の本源的な「無知」の構造を論じようと試みている。